

貢献するのではないだろうか。国の体制の違いは大きいが、模倣して作られた中国科学院のそれに近いへん類似している。

Takhtajan 教授のように英語で闊達な会話ができる研究者は少ないが、込み入った話でなければ、たいがいの研究者と意見交換はできる。

北日本のフロラ研究はその過程で、一度は沿海州やシベリアとの比較研究を避けられぬだろう。現地との共同研究を考えるとコマロフ研究所は遠いが、過去の蓄積を活用した研究展開を考えたらここ以外、最適な相手側研究機関はないだろう。

Takhtajan 教授や日本を知っている Grubov 博士などを別とすれば、日本でも分類学の研究ができるのか、といった質問が飛び出すような、ロシ

ア人学者の現状認識というか、一種の優越感に驚くこともたびたびであった。

#### 引用文献

- Grubov V. I. and Sergienko L. A. 1988. On the condition of herbaria in the USSR. Bot. Zhurn. 73 : 1507-1511.
- Holmgren P. K., Holmgren N. H. and Barnett L. C. 1990. Index Herbariorum Part 1 : The herbaria of the world. 8th edition. New York Botanical Garden.
- Jeffrey C. 1991. The condition of the Leningrad Herbarium. Taxon 40 : 459-460.

(大場秀章 Hideaki OHBA)

#### 田中芳男・小野職愨撰：有用植物図説について

On Yoshio Tanaka and Motoyoshi Ono (ed.) : Illustrations of Useful Plants of Japan.

先にギンモクセイ、キンモクセイについて報告した際（本誌 66 : 246, 1991），1895年発行の Useful Plants of Japan という著者不明の本があり、それにキンモクセイ、ギンモクセイの新学名が載せられているらしいことを述べた。著者不明ということでこれを紹介した Green はこの学名を採用しなかったが、多数の図を載せた著書に著者不明ということはありません、またこの本で当時新進の研究者であった矢田部、松村、牧野氏等の他に日本人として新学名を付けた人がいたらしいので、どのような本か知りたいと思っていたところ、それが何であるかが分ったのでここに報告する。

該当する本は田中芳男・小野職愨撰・曲直瀬愛・小森頼信校：有用植物図説である。明治24（1891）年に大日本農学会から発行された和綴の本で、図3冊、解説3冊（別に英語版1冊、索引1冊）に1016種の原色図と解説とが載せられている。1頁に4図ずつ載せられ、図の上には学名と科名が記されている。応用を目的としているため、配列の順序は本草書と同じで葉菜、根菜、薬用、鑑賞といった区分で並べられている。覆栽という項

があり芝生や砂防用の植物が載せられるなど目新しいものもある。別冊としてやや小型の洋綴で Useful Plants of Japan の表題のもとに、英文の解説書1冊と和名・学名の索引が1冊ある。英語版には Agricultural Society of Japan とあるだけで、著者、編者は載せられていない。服部雪斎の描いた木版刷で、図は簡単だし色は単純なので、岩崎濯園や飯沼慾斎の図に比すべくもないし、解説文も短く、学問的にあまり重視しなかったとみえ、当時の植物学者は全く引用していない。しかし、永年にわたって生物を描いていた画家の手になるものだけあって、植物の特徴をよく捉えていて、何の植物かは正しく判断できる。千種に及ぶ多数の植物が描かれたものなので便利であり、当時7円40銭という豪華本にもかかわらず1895年までに3回の版を重ねている。今日でも通用する内容で、一見する価値のある本である。最近、科学書院（板橋区成増 2-37-2-203）からこの復刻版がだされたので、約8万円と高価だけれども興味ある方は利用することができる。

この本の学術的な価値は、小野蘭山以来の本草学の植物部門に関する最後の集成であることにあ

る。本草学者の植物にたいする考え方、扱い方、また本草学が博物学から農学などの応用の方面へ進んで行く過程を示している点でも歴史的な価値をもつ。本書の出版は Franchet et Savatier, Enum. Pl. Jap. I, 1875; II, 1877から15年後の発行であるが、その発行は着手してから10数年かかっていると言うので、Fr. et Sav. の本の出版のすぐ後に計画されたわけである。田中芳男は Franchet や Savatier と親交があったようで、後者の本にはしばしば田中の名がでてくる。田中等は Franchet の指導を仰いでいたのであろう。本はほぼ Fr. et Sav. の本の学名に従っていて、後者の学名の植物の実体を知る参考にもなるであろう。

田中・小野等が新学名を作ったかどうかの問題であるが、同氏等の本は忠実に Fr. et Sav. の本の学名に従っているようで、応用を目的の中心としていて、当時の新進の植物学者のように学名の当否を研究しようと言う意図は無かったようである。モクセイ以外に新学名らしいものは少し見たところでは見当たらない。キンモクセイ、ギンモクセイの図のそれぞれに *Olea fragrans* alba, *O.*

*fragrans* lutea と書かれている。図は正確でキンモクセイは現在のキンモクセイであり、ギンモクセイも現在の中国系のギンモクセイであることがわかる。和文には学名が無いが、英文の解説では上記の名の下に記載にあたる説明文がある。品種とも変種とも書かれていないが、英語版を見た Green がこれを学名と見たのも無理の無いところである。ところが学名の索引には *Olea fragrans* fl. alba, fl. lutea とある。これは花に白いものと黄色いものがあることを意味しているのであって、学名として記したものではないことを示している。本文や図に alba, lutea とあるのは、その前がラテン語であるため説明もラテン語で記したので、学名を付ける意図ではなかったものと考えられる。Green は著者不明のためにこの名を使用しなかったが、著者が明らかになっても、学名として付けられたものではないから、年代は後でも牧野先生の学名から始めるのがよいであろう。著者名がない以外の形は整っているので、使用しなくてもいいが、学名として使用しないのが妥当だと思う。(山崎 敬 Takasi YAMAZAKI)

## 第15回国際植物科学会議 (XV IBC)

### XV International Botanical Congress, Tokyo

IBC とは 1900年にパリで第1回大会が開かれた国際植物科学会議 International Botanical Congress (略称 IBC) は、植物を対象とした研究のすべてをテーマにする国際会議で、最近では6年に1回開催され、4,000人前後が参加しており、国際生物科学連合 (IUBS) の傘下の国際会議としては最大の規模を誇っている。また、国際植物命名規約の改訂を検討する命名規約会議が開かれ、規約の改訂が行われるのもこの会議である。

この会議はこれまでヨーロッパと非ヨーロッパで交互に開かれ、14回ベルリン、13回シドニー、12回レニングラード、11回モントリオール、10回エジンバラなどでそれぞれ成果をあげてきた。

**第15回会議** アジアではじめて開かれることになった第15回会議は、1993年8月28日 (土)～9

月3日 (金) を主会期に、横浜市国際平和会議場 (パシフィコ横浜) で開催される。

28日の開会式では J. シェルと P. H. レーブンによる基調講演が予定されており、夕方にはウェルカムパーティが開催される。

会議では8つの特別講演と230のシンポジウムが計画されている。プログラムは系統と進化、構造とその動態、植物化学・天然物化学、代謝と生体エネルギー論、発生科学、生態学と環境科学、遺伝、バイオテクノロジーの8分野に整理されているが、本誌の読者に魅力的なテーマも多いはずである。シンポジウム以外の発表はポスター形式で、約1,000のポスター発表が期待されている。

9月3日の閉会式はこの会議の国際母体である国際植物学菌学連合の総会を兼ねるものであり、